

# ブラッド・ダイヤモンド

2007(平成19)年4月7日鑑賞(ナビオ TOHO ブレックス)

★★★★



監督・製作＝エドワード・ズウィック／出演＝レオナルド・ディカプリオ／ジャイモン・フンスー／ジェニファー・コネリー／カギソ・クイパーズ／アーノルド・ボスロー／アンソニー・コールマン／ベヌ・マブヒナ／アノインティング・ルコラ／デイビッド・ヘアウッド／ベイジル・ウォレス／ジミ・ミストリー／マイケル・シーン（ワーナー・ブラザーズ映画配給／2006年アメリカ映画／143分）

## 第2章

面白くするために

……象牙・石油・ゴールドなどと並んで巨大な利権に絡むダイヤモンドの密売はいい商売……？ 『タイタニック』(97年)でのお坊っちゃん顔から完全に脱皮し、野性味タップリのダイヤモンド密売人に扮したディカプリオは魅力的だが、またもアカデミー賞主演男優賞はお預けに……。しかし、アフリカを舞台としたディカプリオを中心とする3人のコラボによる巨大なピンクダイヤモンド捜しの旅は、三人三様の「自由」と「家族」と「<sup>R U F</sup>真実」を追い求めるすばらしい人間ドラマに……。シエラレオネ紛争、革命統一戦線、少年兵などアフリカの実情を映すキーワードに興味を持ちながら、こんな社会派エンターテインメント作品をじっくりと味わいたいものだ。

## 大奮闘のディカプリオだが……

『アビエイター』(04年)での第77回アカデミー賞主演男優賞ノミネートに続いて、本作でも第79回アカデミー賞主演男優賞にノミネートされながら、『ラストキング・オブ・スコットランド』(06年)で圧倒的な存在感を見せつけたフォレスト・ウィテカーにその栄冠を奪われたディカプリオは、またも残念なことに……。しかし、興行収入世界一となった『タイタニック』(97年)での甘いディカプリオの顔は今はなく、第79回アカデミー賞で作品賞・監督賞を受賞したマーティン・スコセッシ監督の『ディパーテッド』(06年)においても、本作においても、「チョイ悪」を通り越した、陰影のあるシリアスな役柄をしっかりとこな

しており、その渋い演技力(?)は相当なもの。第79回アカデミー賞に先立つ第64回ゴールデングローブ賞では『ディパーテッド』と本作で主演男優賞にダブルノミネートという史上初の快挙まで……。このように、『タイタニック』後のくだらない映画(?)『ザ・ビーチ』(00年)や楽しいだけの映画『キャッチー・ミー・イフ・ユー・キャン』(02年)は別として、『ギャング・オブ・ニューヨーク』(02年)にしてもオスカー寸前まで大奮闘しているのだが……。

彼は1974年生まれだから、まだ32歳。今のような努力を続けていれば、近い将来きっとアカデミー賞主演男優賞のゲットはまちがいなし……。

### 日本での前評判は……？

『ディパーテッド』は、①大ヒットとなった香港映画『インファナル・アフェア』のハリウッド版リメイク、②マーティン・スコセッシ監督とのコラボ、③マット・デイモンとの共演、という3つの話題のために、日本でもこれにディカプリオが出演することはよく知られていた。しかし、本作は前宣伝が少なかったため、あまり知られていなかったはず……。したがって、4月7日の公開初日に私が観たナビオ TOHO プレックスでも、「シアター8」という観客席132席の比較的小さな劇場だった。日本での前宣伝が少なかったのは、きっとアフリカを舞台とした「ブラッド」ダイヤモンド、すなわち紛争(血)ダイヤモンドというテーマが、難しすぎるため……。さらに、この作品自体は決して市場に出回っているダイヤモンドにケチをつける等、何らかの政治的主張を目指したものではないが、紛争ダイヤモンドというテーマがテーマだけに、宝石業界がこぞって応援というわけにいかなかったのも当然。したがって、そんな点にも『ディパーテッド』と比べると大きなハンディが……？

### 「アフリカもの」で売れるか……？

近時『ホテル・ルワンダ』(04年)、『ダーウィンの悪夢』(04年)、『ルワンダの涙』(05年)、『ラストキング・オブ・スコットランド』など、アフリカを舞台とした映画が日本でもたくさん公開されている。パンフレットで映画評論家の秋本鉄次氏は「“アフリカ”ブームの映画界」と書いている。しかし、私は「ブーム」

というのにはちょっと異論がある。なぜならここ数年、いくら立て続けに公開されているといっても所詮数本。しかもそのほとんどが単館上映だから、大量宣伝されるわけではなく、観客動員数も興行収入もたかが知れているはず……？

こういう上質な問題提起作が常時ヒットすればいいのだが、残念ながら日本の若者たちは、テレビ局の大量宣伝と連動した作品ばかり観ているのが実態……？

『ブラッド・ダイヤモンド』の舞台はアフリカのシエラレオネ共和国であるうえ、1990年から10年間続いた「シエラレオネ紛争」や革命統一戦線<sup>R U F</sup>など、日本人は誰一人聞いたことがないものが登場する……？ したがって、「アフリカもの」で売ることができればいいが、知的好奇心や社会問題・国際問題への意識が薄い今の日本人のレベルでは、少ししんどいのでは……？

### 3人のコラボもいいもの……

『ディパーテッド』はディカプリオとマット・デイモンの共演が目玉だが、『ブラッド・ダイヤモンド』はディカプリオを中心としたソロモン・バンディー（ジャイモン・フンスー）とマディー・ボウエン（ジェニファー・コネリー）とのコラボによって成り立っている人間ドラマ。背景事情がやけに難しいシエラレオネ共和国を舞台とし、現実に存在したシエラレオネ紛争やRUFを登場させたうえ、ディカプリオ扮する主人公ダニー・アーチャーを「アフリカ生まれの元傭兵」「アフリカ生まれの白人」、そして母親はレイプ後殺され、父親も首をはねられた孤独な男という難しい役柄に設定しているから、この映画がドキュメント風になったのでは、観客はとてついてもついていけないはず……。

そこでエドワード・ズウィック監督はうまくバランスをとって、1個の巨大なダイヤモンド（ピンク・ダイヤモンド）をめぐる面白い人間ドラマをつくりあげた。そんな人間ドラマを盛り上げるためには、2人ではシンプルすぎるため、3人が適当……。そう考えたかどうかは知らないが、監督は、メンデ族の漁師ソロモンとアメリカ人の女性ジャーナリスト、マディーを登場させたうえ、1個の巨大ダイヤモンドを軸にして、見ず知らずの3人を結びつける作戦を……。しかし、この3人のキーワードは、アーチャーは自由、ソロモンは家族、そしてマディーは真実。何ともうまい対比だ。さあ、そんな人間ドラマはどのような展開を……？

## ラブシーンはゼロだが……？

ダイヤの密売人であるアーチャーと、RUFの資金源となっているブラッド・ダイヤモンドの真相に追ろうとしているマディーとの最初の出会いは、アーチャーがマディーに声をかけたために実現したものだが、その結末は最悪……。だって、アーチャーは美人にちょっとチョッカイを出しただけなのに対して、マディーはストレートにブラッド・ダイヤモンドの情報提供を求めたのだから、そりゃうまくいくのはムリというもの。

いくらマディーが美人でも、今ダイヤ密売人として旬の時期を迎えているアーチャーが、イージス艦に関する極秘情報を中国人妻に漏洩した日本のバカな某2等海曹のように、易々と極秘情報を漏らすはずがない……。したがって、本来「水と油の関係」にあるアーチャーとマディーがそれ以上親しくなることはありえないし、ましてや愛しあう関係になる可能性など100万分の1のはず……。ところが、それを結びつけるのが脚本の面白さであり、監督の腕の冴え。もっとも、そんな2人のラブシーンはゼロだが……？

## ソロモンの家族と希望の星は……？

映画の冒頭に登場するのはアーチャーではなく、愛する妻ジャシー（ベヌ・マブヒナ）や子供たちと平和な暮らしをしている漁師のソロモンの姿。ソロモン夫妻の希望の星は自慢の息子ディア（カギソ・クイパーズ）。彼は医者になる夢を追い求めながら、毎日5kmを歩いて学校に通っている。ところが、そんな村がトラックに乗ったRUFの兵士たちによって襲撃されたから大変……。

スクリーンを覗いていると、銃を持った兵士たちのやることは無茶苦茶で、その乱射によって死亡する人々は数知れない有り様。もっとも、RUFが制圧したうえで村人たちに強要するのは、政府に協力せず、RUFに政治的にも軍事的にも協力せよということ。彼らの役に立ちそうにない人間は容赦なく殺されたが、家族と引き離され、とらわれの身となったソロモンは、指揮官の命令によって命を助けられることに……。それはソロモンが体力的にダイヤ掘り作業に適しており大いに使えると判断されたため。これによって、ソロモンは厳しい監視の下で、

奴隷のようにダイヤモンド掘り作業に従事させられることになったが……。

他方、RUFの中に少年兵として取り込まれたディアのこれからは……？ そして、命からがらRUFの襲撃から逃げ出したジャシーや娘の行く先は……？

## アーチャーが目指したのは……？

ダイヤモンドの密売人としていつも危険な橋を渡っているアーチャーだから、ちょっとしたミスで刑務所に入れられたりするのは日常茶飯事……？ 誰だって刑務所に入れられるのはイヤだろうが、いつの時代も刑務所内は「情報の宝庫」だから、必ずしも悪い面ばかりではない……？ 現にアーチャーが巨大なピンク・ダイヤモンドの話を耳にしたのは、刑務所に収容されてきたRUFの兵士コーデル・ブラウン（アンソニー・コールマン）が、同じく刑務所に収容されていたソロモンの顔を見つけるなり、大声で「あのダイヤモンドを返せ！」と叫んだため。

ソロモンは、銃を手に厳重な監視を続けていたコーデルの目をかすめて、巨大なピンク・ダイヤモンドを足の指の間に隠し、それをある場所に埋めたのだった。もちろん、ソロモンは「そんなものは知らない！」と言い張ったが、そこはカンのいいアーチャーのこと……。自分の釈放後、手を回してソロモンを釈放させ、ソロモンに対して「ピンク・ダイヤモンドを隠した場所まで案内しろ」と要求したが、それは果たして何のため……？ もちろん、それによって巨額のカネを手に入れたいという欲求は当然だが、アーチャーにとって今回の一世一代の大仕事は、その枠をはるかに超えたもの。つまり、これを機会に「アフリカ生まれの白人」からの脱出、つまり自由を手に入れることを目指したもの……？

## ソロモンの協力は……？ マディーの協力は……？

「ピンク・ダイヤモンドはお前にはさばけない」「俺と組まなければあのダイヤモンドは無価値だ」と理論面からアーチャーがいくらソロモンを説得しても、ソロモンが易々とアーチャーの要求に従うはずはない。そこでアーチャーが出した条件は、ソロモンの家族を捜してやるという現実的なエサ……。この条件に家族思いのソロモンの心が動かされたのは当然で、以降ソロモンはアーチャーの様子をうかがいながら、アーチャーの協力をすることに……。

他方、マディーもアーチャーに対してジャーナリスト専用車を提供し、アーチャーとソロモンをジャーナリスト仲間に仮装させてピンク・ダイヤモンドの隠し場所に向かうことになったのだが、なぜマディーはアーチャーのピンク・ダイヤモンド捜しに協力したの……？ それは、協力の見返りにアーチャーが、ブラッド・ダイヤモンドに関するシンジケートの秘密をバラすと約束したから。もちろん、アーチャーにとってそんな重大な秘密をバラすことは、自分の命の危険に直結するものだが、ピンク・ダイヤモンドを手に入れアフリカ大陸から脱出することができれば、後は野となれ山となれというのがアーチャーの正直な気持ちだったよう……。しかしそのことからして、今回のアーチャーのピンク・ダイヤモンド捜しはかなりヤケのヤンパチ的な一発勝負で、危険がいっぱい……？

### 人間ドラマ その1——女ゴコロの微妙な変化は……？

この映画の基本的ストーリーは、アーチャー、ソロモン、マディーの3人によるピンク・ダイヤモンド捜しの旅だが、エドワード・ズウィック監督が描きたかったのはその中で展開される人間ドラマ。映画の後半展開されていくその人間ドラマの第1は、当初あれほど相性の悪かったアーチャーとマディーが、全く違う目的から共に危険な行動を続ける中、信頼関係が生まれ、さらに男女の愛が生まれてくること……。

もちろん、マディーはいい女だから、元カレは何人かいたようだが、マディーにとってはそれ以上に仕事が大切だったよう……。しかし、今回のアーチャーばかりは、ちょっと事情が違ってきたから面白い……。最期の命をかけた決死行はアーチャーとソロモンの2人だけの旅になるわけだが、そこでマディーは何と「待つ女」に見事に変身……。こんな女ゴコロの微妙な変化をお見逃しなく……。

### 人間ドラマ その2——ソロモンとディアの父子の絆は……？

今でもアフリカでは、何十万人もの少年が強制的に兵士にさせられているらしい。RUFの部隊の中に無理矢理入れられ、銃を持った少年兵としての訓練を受けたソロモンの息子ディアは、今やその中でメキメキと頭角を現していた。

パンフレットにある伊勢崎賢治氏の「知られざるシエラレオネ紛争の10年」に

よれば、「RUFの組織は、年功序列で兵士の地位が決まるわけではなく、勇敢に戦ったものが上の階級に行きます。だから、時には30歳以上の部下を従えた少年兵もいて、殺人の命令を出したのが少年兵だったりもするわけです」とのこと。現にジャシーからかわいがられたディアは、今や親のことなど完全に忘れ、人殺しマシンと化していた。アーチャーと共にピンク・ダイヤモンドを求める決死行を続けているソロモンがある時発見したのは、RUFのトラックの荷台に乗っているディアの姿。そこでソロモンはアーチャーの制止も聞かず、無謀にもRUFの部隊の中に潜入し、ディアに対して「一緒に帰ろう」と声をかけたのだが……？

さあ、こんな危険を顧みない絶対的な父親の愛に対して、今や心を失ってしまった感のある息子はどう応えるのだろうか……？ そして、そのことがピンク・ダイヤモンドを求めるアーチャーとソロモンの旅に、どのような影響を……？

### 人間ドラマ その3——アーチャーの本性は善……？

ゲーリー・クーパーがイングリッド・バーグマンと共演した名作が『誰が為に鐘は鳴る』（43年）。フランコ政権に抵抗するゲリラたちと共に従事した橋の爆破任務の中で足を負傷したゲーリー・クーパー扮する義勇軍の兵士ロバートが、イングリッド・バーグマン扮する地元ゲリラの娘マリアたちを逃がすため、自ら犠牲になって迫ってくる政府軍に対して機関銃を撃ち続けるというラストシーンは強く心に残っているもの。「正義のため」「革命のため」といくら自分に言い聞かせ鼓舞しても次第に失われていく意識の中、「マリアのため」と考えれば俺はまだ闘うことができるというゲーリー・クーパーのセリフは、本当に感動的で、人間の本质をついた見事なラストシーン。

『ブラッド・ダイヤモンド』には、私が思わず思い出したこれと同じようなシーンが登場するから、是非それに注目を……。すると、そこから見えてくるアーチャーの人間像は……？ ダイヤの密売人として、ウラ社会の中で人を騙し、悪の限りを尽くしながら生きてきたアーチャーだったが、その人間としての本性は善……？ そんな心動かされる人間ドラマをたっぷりと楽しみたいものだ。

2007(平成19)年4月9日記